

乳幼児期の靴の着脱の環境要因に関する研究

研究代表者	松田 典子	(文教大学准教授)
共同研究者	和田上 貴昭	(日本女子大学准教授)
	渡辺 治	(渡辺治建築都市設計事務所所長)
	高橋 久雄	(社会福祉法人至誠学舎立川理事)
	三浦 修子	(至誠第二保育園園長)
	長谷川 育代	(万願寺保育園園長)
	廣瀬 優子	(しせい太陽の子保育園園長)
	靄田 清江	(至誠あずま保育園園長)
	高橋 智宏	(至誠いしだ保育園園長)
	高橋 滋孝	(至誠ひの宿保育園園長)
	高橋 紘	(至誠保育福祉研究所研究員)

研究の概要

本研究では、乳幼児期に身につける基本的な生活習慣形成の一つである靴の着脱について、前回の研究に引き続き、考察した。調査対象の保育所6園において、物的・人的環境に着目して、1、2歳児の靴の着脱時の様子の観察を行った結果、以下のことが考察された。

- (1) 靴の着脱時には、段差なし（平面）で履くよりも、段差がある場所で座って履いた方が靴の着脱がしやすい。
- (2) 14cm、23cmの2種類の高さの椅子を用意したところ、23cmよりも14cmの方が1、2歳児には適していた。
- (3) 保育者の声掛けは、全ての園で、子どもの様子を見守りつつ、適宜、1、2歳児にわかるような表現（「びりびりしようね」「ぺったん」など）で行っていた。
- (4) 園によって、高さや場所を選べる場合、別の段差の場所に移動する、支えにつかまるなど、様々なものを利用しながら子どもが靴を履く様子が見られた。
- (5) 靴を履く、脱ぐという行為は、それ自体が目的ではなく、目的があった上での行為であるため、その目的によっては、子どもの気持ちに乗らず、靴が履けなかったりすることがある。目的により、まだ靴の着脱があまりできていない時期でも早く靴を履けることを考察できた。

その結果、靴を履く、脱ぐという行為には、①やる気・モチベーション（目的のために早く履こう・脱ごうとする意識）、②靴の着脱についての知識や経験、知恵、③身体的な成長（体の動作、身長など）、④椅子や段差、支えなどの物的環境、が関わっており、①、②を引き出すために、⑤保育者の声掛けや援助が必要となることがわかった。

キーワード（5つ）：靴の着脱、保育所、物的環境、人的環境、発達

I. 研究の動機と研究目的

1. 背景

現代の生活で、人間の歩行に靴は欠かせないものである。靴を履く、脱ぐという生活行為は、幼少の

頃に身につけ、やがて高齢期になっても続く、一生のものである。1、2歳児の靴の着脱の様子を考察することは、そこから人間の発達過程の入口を知ることにもつながる。

本研究では、前回（2019年度）に行った研究に引

き続き、乳幼児期に身につけることが必要とされる靴の着脱についての考察を行った。前回の研究では、都内の保育所6園を対象に6月～11月までの約6か月間、月1回程度の観察調査を行い、1歳児クラスや1、2歳混合クラスにおける子どもの靴の着脱動作について調査の結果、以下のことが考察された。

- (1) 6月～11月頃までの約半年間に、各園において靴の着脱ができる割合は上がる傾向がみとれた。
- (2) 各園により、チェックリストの集計結果による靴の着脱のできる割合に大きく差がみられた。
- (3) クラス形態が異なる特徴を持つ2園での集計結果を比較し、考察したところ、1、2歳児クラス混合の園では、2歳児の子どもが1歳児の子どもを手伝う様子が多くみられ、子ども同士の学び合いがよく観察された。

また各園の出入口（玄関）の様子を観察すると、出入口の高さ（0～30cm）や幅（90cm～250cm程度）に大きな違いがみられ、こうした環境の違いも、靴の着脱に大きな影響を与えるのではないかと考えられた。こうした子ども同士の学び合いや保育者の声掛けを人的な環境とし、また各保育所の靴の着脱を行う玄関等の間口や高さの違いなどを物的環境として、これらが子どもの靴の着脱に影響を与えていることが示唆された。

そこで、本研究では、各園の靴の着脱の様子の違いを物的環境と人的な環境に分けて、より詳細な考察を行った。

靴の着脱は、靴の歴史が長い欧米と異なり、日本においては、靴は屋外で履くものであり、屋内では脱ぐ、という家屋構造や生活習慣などが存在する。靴の着脱する動作をどのように教育するかということも、靴にまつわる日本文化や家屋構造特有の問題である（塩野谷ほか、2008）。また坂口（2013）によると、本来、靴の着脱時には手を使うべきところ、日本人は、靴の着脱時に手を使わないことが多いと言われ、これは幼少期からの靴の着脱に関する教育がないことから、このような履き方が定着しているのではないかと指摘している。

靴の着脱における我が国独自の文化は、小学校の玄関等での靴から上履きへの履き替えにもみることができる。明治5（1872）年に学制が配布され、近代的な学校制度が始まり、学校建築でイス座が導入されてきた頃から、靴と上履きの二足制が始まってきた。神崎・砂本（2019）の調査では、2018年の全国の公立小学校へのサンプリング調査で、99.7%が二足制を採用しているという結果を示している。そのため、ほとんどの小学校で、靴と上履きの履き替

えを行う機会があることがわかる。

乳幼児期の靴の履き方について、春日井（2022）では、「子ども靴でマジックテープをしっかりと留める履き方をすることは非常に重要」ということを指摘している。靴紐の場合、靴紐が緩いと足が靴に固定されないため、足の指は脱げないように力が入り、それに付随して、ふくらはぎにも力が入り、足に痛みも出やすい。靴紐をきちんと結ぶように指導しただけで、足の痛みが消失する例（塩野谷、2005）も引用されている。

靴の履き方や大きさが身体に与える影響については、塩野谷・伊藤（2018）は、サイズ選び（大きすぎる・小さすぎる）、履き方（紐を結ばない・踵を踏む）などの不適切な履物の履き方を挙げ、靴の選び方や履き方の指導によって足部や下肢の痛みの症状が改善する子どもがいると述べている。具体的な靴のサイズは、子どもの場合は成長を見越した余裕が必要であるため、つま先からは、「足の形状+捨寸+成長寸」として10～15mmの余裕が必要であり、5mm以下となれば小さすぎるので、靴の買い替えが必要と説明されている。また面ファスナーや紐のような留め具も1本のシングルタイプよりも2本タイプの方が、固定性が上がるので望ましいこと、足関節が未完成で歩行が不安定な3歳ぐらいまでは履きこみが深く、側方の動揺を安定させる足首までであるハイカットタイプがよいことが挙げられている。また靴の履き方については、集団行動では全体での素早い行動が重視されるあまり、紐や面ファスナーなどの留め具のある靴でも手を使わずに着脱することが多いが、そのために足が靴に固定されずに脱げやすく不安定となり、骨折や捻挫の原因となると指摘している。小林ほか（2020）の保育園と幼稚園での調査では、約3割の子どもに、「靴擦れ」や「爪が割れる」などのトラブルがあり、実際の足のサイズや靴の正しい選び方、履き方が出来ていない可能性が示唆されている。

子どもの具体的な靴の履き方については、武藤（監修）玉島・小野・高山（2020）『0歳からの足育のすすめ』では、子どもが自分で「かかとトントン」で靴を合わせ、「ベルトでギュッ」とするように仕上げていくと説明されている。靴の履き始めの頃から「かかとトントン、ベルトでギュッ」と靴を履く習慣が身に着くと、2歳頃から自分で履こうとする様子がみられるという。

靴を正しく履くためには、まず踵を合わせることから始めるが、そのためには、靴は座って履く必要があるという指摘もある。幼稚園児の靴の着脱を撮

影し、立って履く子と座って履く子の着脱時間を計測したところ、ほとんど時間的差異は認めなかったという報告もあるという（坂口、2013）。

また靴を履くようになるためには、子どもの歩行などの発達に合わせて靴の履き方を見ていくことも必要である。幼児期の子どもの歩行運動は、1歳半頃には一人で歩くことができ、4歳頃には体のバランス感覚もつき活発な運動が可能となる。

歩行の発達は、子どもの発達によって、以下の特徴がみられる（田中真介監修、乳幼児保育研究会編著、2009）。

- ① つかまり立ちから伝い歩き（10～12か月）
- ② 歩行の完成（1歳前半）
 - 1) 1歳1か月～1歳3か月
 - ・ 2～3歩の歩行を始める（個人差あり）。最初は足を開き、手をあげて2～3歩歩く。
 - 2) 1歳4か月～1歳6か月
 - ・ 円滑な直立二足歩行が可能になり始める。
- ③ 調整しながら歩く（1歳後半）
 - ・ 直立二足歩行がしっかりした足取りになり、左右の足の運び、つま先とかかとの着地が明確に交代する。
 - ・ 歩行が盛んになり、立位から「斜めの姿勢」がとれ始める。道草をしていろんなところを覗いたり、触ったり、調べたりする。
 - ・ 遠くへ長く調整しながら、早く・ゆっくりと歩けるようになる。
 - ・ 四肢についても、両腕・両足のそれぞれ両方あるいは片方を屈伸、回転、交錯させることができ始める。

そこで、歩行の完成に向かう1歳児（上記の「③調整しながら歩く（1歳後半）」）、歩行が完成した2歳児、と大きく分けてとらえ、子どもの靴の着脱の様子を考察することとした。

2. 研究目的

1、2歳児の生活習慣形成の中で、靴の着脱について、物的環境や人的環境によってどのような違いがあるかを明らかにする。人的環境としては、保育者の声掛けや援助によって、子どものやる気や上達に違いがみられるのかを観察し、物的環境としては、靴の着脱時の玄関の高さや広さ等による違いで、子どもの靴の着脱の様子を考察する。

II. 研究方法

1. 対象者および観察場面

調査対象と期間は以下の通りである。

対象者：東京都Z市内の保育園6園（A～F保育園）の1、2歳児園児

期間：2022年6月～11月（6ヶ月間）

観察場面は、外遊び等へ出かける前後の靴の着脱場面とした。観察の記録は、ビデオカメラによる撮影で記録した。1回あたりの観察時間は、10～20分程度であった。またビデオ撮影と同時にあらかじめ作成しておいたチェックリストを用いて、園児ごとに靴の着脱のできた点や援助の有無をビデオ撮影と同時あるいは撮影後に記録した。チェックリストは、ビデオ撮影による考察を補完するものとして用いた。

ビデオの観察は、1、2歳児を対象とし、主に1歳児を中心に行った。ビデオ撮影による観察は、月に1回程度、毎月上旬（1～15日頃）に実施するようにした。物的環境として、各園における玄関や出入り口の高さや広さ、人的環境として、保育者の声掛け、子ども同士の関わり方などの違いを考察するようにした。

2. 分析方法

ビデオ撮影した画像は、記入したチェックリストとともに園児の靴の着脱の様子を確認した。声掛けの様子はビデオ撮影とチェックリストの記入から分析を行った。

靴の着脱は、そのプロセスを観察して次の動作パターンに分類した。

1) 靴を履く動作

- 1-1. 靴の面ファスナー等をはかず
- 1-2. つま先を靴に入れる
- 1-3. 靴を履く（かかとを入れる）
- 1-4. 面ファスナー等を押さえる

2) 靴を脱ぐ動作

- 2-1. 面ファスナーをはかず
- 2-2. 靴を脱ぐ

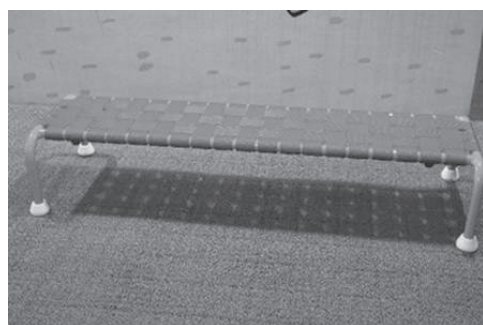
このプロセス別にチェックリストを作成し、園児別にこれらの項目が達成できているか否かを記録した。またその際に、保育者の援助の有無、また靴の着脱場面別に、他の園児との関わりの有無も同時に記録した。

ビデオによる撮影の映像とチェックリストを基にして、子どもの靴の着脱の様子を考察した。

また各園での環境を同様の条件とするために、研究の観察の途中で、①高さ14cmの台座、②高さ23cmのベンチ椅子を各園で同一のものを用意し、靴の着脱の様子を観察した。



① 台座：高さ14cm



② ベンチ椅子：高さ23cm

3. 倫理的配慮

調査実施にあたっては、事前に観察対象者の保護者に対して、保育所を通して調査内容（靴の着脱におけるビデオ撮影と研究目的のみの使用、個人情報流出防止に努めること、調査途中で中断の申し出があった場合にも不利益が生じることなく調査への同意を取り下げることができること等）についての説明を行い、保護者から同意を得られた園児だけを調査対象とし、同意書を提出して頂いた。

Ⅲ. 結果

観察時期（6～11月）の間に、園別に靴の着脱の様子を考察した。園の物的環境である「着脱場所の高さ（段差の有無）」を縦軸、人的環境である「1、2歳児クラス活動の形態（混合か別か）」を横軸として、各園の特徴をプロット化したものが以下の図1である。

A 保育園は、出入口にテラス段差（7cm程度）があるが、靴の着脱は、出入口を出た平地（0cm）に敷物を敷いて行っている。またクラスの活動は、1歳児、2歳児で別である。

B 保育園は、登降園に利用する玄関出入口が高さ7cmである。近隣の広場や公園に散歩に行くときに利用する西側出入口は高さ2cmとほぼ平面である。

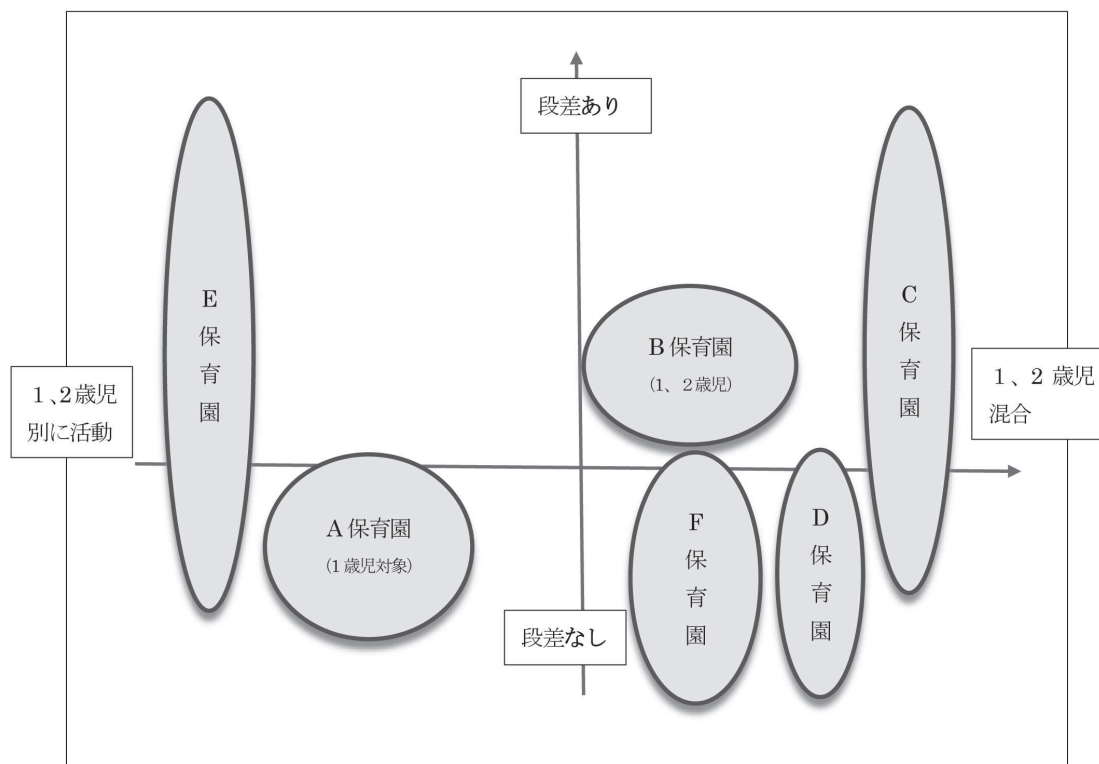


図1 着脱場所の高さ（段差の有無）と1、2歳児クラスの形態（混合か別か）による園の特徴

1歳児、2歳児縦割りクラスで、普段の活動は、混合で行っている。

C保育園は、屋外テラスは高さ15cm程度の段差があり、室内玄関は段差なし（0cm）である。今回の調査では、この段差ありと段差なしの2か所で靴の着脱の様子を考察した。1、2歳児と一緒に活動しており、前回の研究でも子どもが学び合う様子がみられている。

D保育園は、平面の段差なし（0cm）のところで、普段の活動は、混合で行っている。

E保育園は、デッキが広く（奥行280cm）、段差があるところやないところを選んで履くことができる。園庭出入口は高さ15cmであり、そこで靴を履く子が多く、縁側は平面（0cm）でそこで靴を履く子もいる。

F保育園は、玄関が平面の段差なし（0cm）で、今回、観察対象としたのは、1、2歳児の縦割りクラスである。

上記の6つの保育所（A保育園～F保育園）で、1、2歳児の靴の着脱の様子を考察した。靴を履く・脱ぐ動作について、園別に考察した結果は、次の通りである。

(1) A保育園

6月中旬から11月中旬にかけて6回の観察を行った。ビデオ撮影と同時にチェックリストを作成した。今回、観察対象としたのは、1歳児クラスである。普段の活動は、クラス別に行っている。

< A保育園 >

- ・園庭への出入口：テラス段差7cm、幅120cm
- ・靴の着脱場所：高さ0cm（段差なし）、幅240cm
- ・調査対象クラスの人数：1歳児 14人
- ・年齢分布：調査開始時（6月）1歳3か月～2歳2か月 → 調査終了時（11月）1歳8か月～2歳7か月

1歳児は座って靴を履くため、建物から出たところの敷物の上で、靴を履いている。最大5名程度の園児が、敷物の上で靴を履けるようになっている。保育者は、面ファスナーを外す前に、園児に「○○ちゃん、びりびりにとって」と声をかけたり、園児がかかとを入れた後に、「はい、ぺったん」と声をかけたりしながら、援助を行なっている（写真A-1）。

また多くの園児は、敷物の上で、靴を履いているが、一部の園児は、出入口のテラス段差の7cm程度の段差のところに座って履こうとする様子もみられる（写真A-2）。



（写真A-1） 1歳児への援助の様子



（写真A-2） 7cmの段差に座って履く様子

そこで、ある程度の高さがあった方が履きやすいのかどうかを検証するために、高さ14cmの台座、高さ23cmのベンチ椅子、の2種類の高さを設定して、子どもの靴を着脱する様子を観察した。どこで履くかは、子どもが自由に椅子を選んだり、敷物の上で履くかを選んだりしていた。

高さでの靴の履き方を考察した結果、靴の着脱が安定している子は、段差に関係なく履くことができた。

子どもの身長により、足が地面にとどかないと、体が不安定で自分で履くことは難しい様子も考察できた。特に、高さ23cmでは、靴を履かない方の足がしっかりと地面を踏みこめず、また子どもの手が靴を履く方の足にまで届きにくく、足を挙げて履く様子が見られた（写真A-3）。

また高さがあることで、いつもは靴を履けない子が、靴を履く様子が見られた。一例では、月齢1歳11か月の子が、はじめは、高さ23cmのベンチ椅子を選んだときは靴を履くことができなかったが、その後、高さ14cmの台座に移動すると、自分一人で履くことができた（写真A-4）。

また6月から11月まで半年をかけた考察では、全体としての靴を脱ぐ時間が5分、履く時間が10分ぐらいで変わらなくても、子どもの成長とともに、一人ひとりの着脱時間が早くなってきている様子が見られた。



(写真A-4) 高さ14cmの台座で履くことができた
(1歳11か月)



(写真A-3) 足を高く上げて履く様子

保育者の声掛けは、自分でできる子は見守り、自分でできない子に対して、「びりびりはがして」、「足をぎゅーと入れて」など、子どもに合わせた必要な声掛けを行っていた。

靴の形状では、面ファスナーがない子もいたが、着脱状況や時間などに大きな違いは見られなかった。

(2) B保育園

6月中旬から11月中旬にかけて8回の観察を行った。ビデオ撮影と同時にチェックリストを作成した。今回、観察対象としたのは、1歳児、2歳児縦割りクラスである。普段の活動は、混合で行っている。

< B保育園 >

- ・玄関出入口（登降園時に使用） 高さ7cm 幅250cm
- ・西側出入口（散歩時に使用） 高さ2cm 幅170cm（ほぼ平面）
- ・調査対象クラスの人数：1歳児8人、2歳児9人の計17人
- ・年齢分布：調査開始時（6月）1歳3か月～3歳2か月 → 調査終了時（11月）1歳8か月～3歳7か月

B保育園では、近隣の広場、公園に散歩に行くと

きに靴を履いている。靴の履き方は、一斉ではなく散歩の準備ができた園児から順番に靴を履く。

観察すると、段差があまりないところよりも、玄関出入口のように7cm程度の段差があった方が履きやすい様子が見られた。また、自分でつま先と踵が入られるようになった時は、もう少し段差があった方が足に力を入れて踵を入れることが出来る様子であった。

面ファスナーを外すのは1歳児でもほとんどできるが、靴を履いて面ファスナーを止めるところではできていない。靴を脱ぐ動作はほとんどできているが、1歳児の低月齢児は踵を抜く動作が難しい。

疲れている時や周囲の動きが気になって気持ちが散漫になっているときは大人が関わっても靴を履くことに気持ちが向いていない。そのため、これまで靴を履くことが自分でできていても、観察回によっては、できなくなるようなときもあった。

言葉かけは「ビリビリしようね。」「ペッタン」等を行うことで、1、2歳児ともに靴を履くということを理解しており、保育者の援助の前に、靴を履こうとしていた。

次に、1、2歳児での違いについて、以下のような考察ができた。

1歳児は身体が小さく柔らかいため、身体を曲げられる。そのため、ほぼ平らな場所でも靴の着脱ができる。しかし、ビデオ観察により確認してみると、正面玄関の7cmほどの高さがあった方がつま先を入れたり、踵を踏み入れたりする力が加えやすそうな様子であった（写真B-1、B-2）。



(写真B-1) 玄関出入口 高さ7cm 靴を履く



(写真B-2)
西側出入口ほぼ平面

2歳児は身体も大きくなり背骨などもしっかりしてきたためか、平らな場所で体を丸めるなどの動作がやりにくくなっている。平面（0cm）、7cmのこれまでの環境に加えて、14cmの台座、23cmのベンチ椅子も導入し、高さによって違いがあるかを考察した（写真B-3、B-4）。その結果、7cm、14cm、23cm等の段差があった方が履きやすい様子が考察できた。2歳児は平均的に踵を入れ踏み込む力が入れやすいのは、14cmのようだった。11月の観察時に身長92cm～100.4cm程に成長していた2歳児は23cmでも履きやすさを感じた。地面にしっかり力が入られるため、23cmの高さで履きなれると、小学校の就学時に求められる「立って靴を履く」に繋がる可能性がある。



（写真B-3） 14cm台座（踵に手を入れる様子）



（写真B-4） 左23cmベンチ（2歳児）
右14cm台座（1歳児）

子どもが靴を履く様子と脱ぐ様子のそれぞれについては、以下の考察ができた。

まず、子どもが靴を履く様子は、1、2歳児で次の違いがあった。

1歳児は周りの物や動きに目が行き、自分が今やろうとしていることに目が向かない。そのため、保育者の声かけで気づいて行う様子が見られた。また、家庭では大人が全てやってしまいがちな年齢なので、保育者がやってくれるのを待つ姿が低月齢児に見られた。「自分で」という気持ちが強くなる2歳～3歳の間になると逆に手を出されると嫌がるようになる（いやいや期）。子どもは身体の機能が発達し目と手の協応が出来るようになる。しかし、気持ちと

は反対に機能的に未熟な部分もあるので、「手伝った」と分からないようなさりげない支援、「一人でできたね。」などの声掛け、「お手伝いしてもいいですか。」と尋ね同意を得てから保育者は手を貸すようにしていた。

観察が進み、10月頃になると、1歳児は、自分で人の様子をみて、履こうとするようになり、2歳4か月～6か月ぐらいの子は、ほとんど保育者の援助なく靴を履けるようになった。また話をよく聞く子が早く履ける傾向にあるようであった。

2歳児は目的をもって行動するので、「これからテラスでシャボン玉しようね。」「今日は〇〇に行きましょう。」などの声掛けにより、さっさと靴を履く姿が見られる。時々、一点を見てボーっとしている子でも声をかけると我に返り靴を履きだす。

子どもが靴を脱ぐ様子については、1歳児、2歳児共に①面ファスナーが外せる、②かかとに手が行き、かかとから外す、という手の動きが出来ると簡単に脱ぐことができた（写真B-3）。1歳児も靴を脱ぐ動作は2歳前からできていた。特に保育園では戸外遊びの後、「お昼ご飯食べようね。」と帰って来るので、あっという間に靴と靴下が脱げるようになっている。保育者の声掛けによって、靴の着脱の後に楽しい目的があることがわかると、その時は靴の着脱が早くなる様子がみられた。

（3）C 保育園

6月中旬から11月中旬にかけて11回の観察を行った。ビデオ撮影と同時にチェックリストを作成した。今回、観察対象としたのは、1歳児、2歳児クラスである。普段の活動は、混合で行っている。

< C 保育園 >

- ・屋外テラス（段差あり） 高さ15cm程度 幅360cm
- ・室内玄関（段差なし） 高さ0cm（平面） 幅200cm
- ・調査対象クラスの人数：1歳児8人、2歳児10人の計18人
- ・年齢分布：調査開始時（6月）1歳8か月～3歳1か月 → 調査終了時（11月）2歳1か月～3歳6か月

観察を始めた頃は、1歳児は自分で履けず、保育者の補助が必要であった（写真C-1）。保育者は、自分で履けない子に足を入れさせて様子を見て、その後、「パッチンするんだよ」と声掛けすることで、面ファスナーの留め方を教えている。

15cmの高さの段差のところでは、1歳児は足が届かず、体を曲げることができない様子である。2歳頃で足が届いて3歳頃で手が伸びる様子が見られた。

2歳児はテラスの段差を利用し、段差なしでは自分で履けない子も段差があると履ける様子が見られた。1歳児は、段差の有無は関係ない様子であった（写真C-2）。



（写真C-1） 段差あり 1歳児



（写真C-2） 段差なし（平面） 1歳児

また靴が履ける子であっても、平面で靴を履く様子が見られた（写真C-3）。

2歳児は9月には全員が靴を履けるようになり、靴を履く意欲が高まっている様子が見られるようになった（写真C-4）。



（写真C-3） 段差あり1歳児（左）、2歳児（右）



（写真C-4） 2歳児が靴を履く様子

2歳児においては段差がある方が履きやすそうな様子が観察できたことから、23cmの高さのベンチ椅子、14cm台座、で靴を履く様子を観察した（写真C-5）。23cmのベンチでは、2歳児では足を高く上げて靴を履いており、1歳児では、足が床につかず、靴を履く際に保育者の援助が必要となる様子が見られた。また14cmの高さの台座では、1歳児もしっかりと足をつけることができ、靴を履く様子が見られた（写真C-6）。



（写真C-5） 23cmの高さで靴を履く様子
（1歳児、2歳児）



（写真C-6）
14cmの高さで靴を履く
様子（1歳児）

また10月頃になると、2歳児が1歳児を手伝うような子ども同士の関わりが見えるようになった。また靴を脱ぐ時に座るが、保育者は、小学校の就学時を見通して、立ってやるように声掛けしている。

(4) D保育園

7月中旬から11月中旬にかけて5回の観察を行った。ビデオ撮影とチェックリストの作成を行った。今回、観察対象としたのは、1歳児、2歳児クラスである。普段の活動は、混合で行っている。

<D保育園>

- ・玄関 段差なし(0cm) 間口134cm 幅250cm弱。人工芝。
- ・調査対象クラスの人数：1歳児10人、2歳児8人の計18人

観察を続けた結果、9月から2歳児は靴を自分でほぼ全員が履けるようになってきているが、1歳児は保育者の援助が必要である。D園で、靴の左右について、子どもが保育者に確認して履いている様子も見られる。靴の左右については、子どもが迷っているときに、保育者が「左だよ」と声掛けをすると、2歳児の子では、「こっち」と確認して履く様子が見られた。左右の認識は5歳児からと言われているが、2歳児からわかっている子もいるのは、普段の家庭生活などで、靴の特徴から左右の見分け方などを教わっているためではないかと思われた。

D園では、靴の着脱にかかる時間について、一人ひとり計測を行った。

1歳児では、観察を始めた6月時点で、2歳1か月の子が一人で履ける様子が見られたが、それ以外の子は、それよりも月齢の高い子でもまだ保育者の援助が必要である。1歳児の靴の着脱については、個人差があり、月齢に関係なく、履くことができる子とだんだんと保育者の援助があって履けるようになってきている子が見られた。

2歳児では、7月の観察ではシャボン玉をやるという目的のため、靴を履く時間はかかるが、いつもより早く履こうとする子が多く、2歳9か月の子～3歳1か月の子が、29秒から43秒で靴の着脱を行っていた。またそれから2か月後の9月では、20秒前後で履く子が多くなり、18秒から48秒（その他、1名のみ集中せずに58秒）で履くようになり、一人ひとりの靴を履く速さが早くなっていることが考察できた。

1、2歳児が混合であるが、子ども同士の関わり合いは、今回の観察では、関わりを観察することができなかった。

(5) E保育園

6月中旬から11月中旬にかけて6回の観察を行っ

た。ビデオ撮影とチェックリストの作成を行った。今回、観察対象としたのは、1歳児、2歳児であるが、1歳児を中心とした観察を行った。

<着脱場所>

- ・縁側 平面(0cm) 奥行280cm
- ・園庭出入口 高さ15cm 幅89m
- ・調査対象クラスの人数：1歳児22人、2歳児24人の計46人
- ・観察対象となった園児の年齢分布：調査開始時(6月) 1歳2か月～2歳7か月 → 調査終了時(11月) 1歳8か月～2歳7か月

E保育園は、デッキが広く、段差があるところやないところを選んで履くことができる。園庭の出入口は高さが15cmあり、そこで靴を履く子が多くみられる(写真E-1)。また平面で靴を履く子もいる(写真E-2)。保育者は、「びりびりしようね」と声掛けの後、しばらく様子を見守り、援助を行っていた。



(写真E-1) 15cm高さで履く様子 (1歳児)



(写真E-2) 平面で履く様子 (1歳児)

靴を履く様子を観察すると、高さ15cmの園庭出入口では、足を高く上げて靴を履いている姿が見られた(写真E-3)。またガラス戸の足洗い場に腰かけて靴を履く様子や、支えにつかまりながら履く様子も見られた(写真E-4)。1歳児では、様々なものを利用しながら、靴を履こうとする様子が観察された。



(写真E-3) 足をあげて靴を履く様子
(1歳児)



(写真E-4) 平面で支えにつかまりながら履く様子(2歳児)

1歳児は平らな面で着脱している子も多いが、高さ23cmの椅子を置いて考察した(写真E-5)。高さがあるところでの着脱は、2歳児は自分でできるが、1歳児の場合は、最初に保育者が靴への足の入れ方を支援した後、自分で行うことができる様子が考察できた。



(写真E-5) 高さ23cm(1歳児(左)と2歳児(右))

(6) F 保育園

6月中旬から11月中旬にかけて6回の観察で、ビデオ撮影を行った。今回、観察対象としたのは、1、2歳児の縦割りクラスである。

<着脱場所>

・玄関 平面(0cm)

・調査対象クラスの人数：1、2歳児24名の計37人

段差なし(平面)で、1、2歳児の縦割りクラスの靴を履く様子を考察した。靴を履く時に、保育者3名がついているが、保育者が手伝う必要がある子とない子がおり、全体で7～10分くらいの時間がかかっている。

9月の時点で、2歳児はかなり自分で履けるようになってきているが、声掛けしないと気持ちが乗らない時があり、そのような場合に声掛けの必要性があることが観察できた。

また面ファスナーをはがすのは、左右の手ではがしやすい方で行っており、操作しやすい手の方で、靴を履いている様子が見られた。1、2歳児では、右利き、左利きといった違いはあまりないのか、はがしやすい方で行っている様子が見られた。

IV. 考察

保育所6園における1、2歳児の靴の着脱時の様子の観察を行った結果、次のことが考察された。

靴の着脱時には、段差なし(平面)で履くよりも、段差がある場所で座って履いた方が靴の着脱がしやすい様子が観察できた。子どもの靴の着脱に必要な動作として、足の踵を靴に入れて踏み込む動作が必要であり、そのためには、足が地面に着く高さであることが必要である。14cm、23cmの2種類の高さの椅子を用意したところ、座った様子からは、1歳児では高さ23cmのベンチ椅子では足が地面に届いていない場合もあり、23cmよりも14cmの台座の方が1、2歳児には適していた。

また1、2歳児では、身長が異なることや手の使い方が器用になることから、年齢に応じて違う様子が見て取れた。1歳児は段差がない場所(平面)でも靴を履いていたが、2歳児は、高さがあった方が足を踏み込んで靴に入れやすく、靴を履きやすい様子が観察できた。

手を靴に入れて引っ張るような動作をするためには、体を曲げて屈伸した状態で、靴に手が届くことが必要であり、23cmの高さよりも14cmの高さがよいことがわかった。

以上より、子どもの足が地面につくことと、体を曲げて靴の踵に手がつくことが、台座の最適な高さを決める条件であることが考察できた。

次に、保育者の声掛けは、全ての園で、子どもの様子を見守りつつ、適宜、1、2歳児にわかるような表現(「びりびりしようね」「べったん」など)で

行っていた。またすべての活動場面で、保育者の声掛けは、靴の着脱ができる程度は個人差が大きいことから、大勢への声掛けではなく、一人ひとりに話しかけるような声掛けを行っていた。また小学校の就学時には、靴は立って履くように指導されることもあることから、1、2歳児では立ったまま履くということは、体のバランスを保つのが難しいため、まだできないが、一部の園では、先を見通して、立ちながら履くことにつながるような声掛けをする場面も見られた。

また靴の履く場所を平面や段差のあるところなどを自由に選べる園では、ガラス戸の足洗い場に腰かけて靴を履く様子や、支えにつかまりながら履く様子などが見られた。このように様々なものを利用しながら子どもが靴を履く様子が見られたことから、1、2歳児の子どもは、環境にあるものを使って、自分で工夫して履くこともできることが考察できた。

最後に、靴を履く、脱ぐという行為は、靴を履くことや脱ぐことそれ自体が目的なのではなく、靴を履くことで外に出て遊べる、室内で昼食をとるために外から帰ってきて靴を脱ぐ、といった目的があった上での行為である。そのため、その目的によっては、子どもの気持ちに乗らず、靴が履けなかったりすることがある。子ども一人ひとりの靴の着脱時間を計測した園では、子どもが楽しんでいる目的によって、まだ靴の着脱があまりできていない時でも早く靴を履けることを考察することができた。

これらのことから、靴を履く、脱ぐという行為には、①やる気・モチベーション（目的のために早く履こう・脱ごうとする意識）、②靴の着脱についての知識や経験、知恵、③身体的な成長（体の動作、身長など）、④椅子や段差、支えなどの物的環境、関わっていることがわかる。また①、②を引き出すために、⑤保育者の声掛けや援助が必要となることが明らかとなった。

V. 今後の課題

本研究における残された課題として、次の3点が挙げられる。

まず、物的環境としては、段差を中心に考察したが、段差以外の物理的な条件をより考察する必要がある。靴の着脱する場所を自由に選べる園では、側にあった支えを利用したり、違う高さの段差がある場所を選んだりするなど、子どもが工夫する姿が見られた。このことから、1、2歳児が自分でどのように工夫して靴を履くのか、こうした道具を選べる

条件下で検証してみることが求められる。

靴を脱ぎ履きする際や歩行時に、支えや手すりを利用するというのは、高齢期にも見られる行為である。また靴を履くという行為において、例えば、大人は足の踵を靴に入れる際に、靴べらを用いることもある。靴の着脱時において、乳幼児期に限らず、人間の様々な発達過程で、生活の中で用いられている道具がある環境下で、子どもがどのようなものを選択するのかを検証することで、子どもから大人までの発達の様子や違いが考察されるかもしれない。

次に、靴の形状や大きさについての考察が残されている。本研究では、靴は子どもが普段から履きなれた靴で行った。そのため、様々な靴があるが、統一して行うことをしなかった。多くの子どもの靴は、面ファスナー付きであったが、面ファスナーがない靴もあった。今回の観察時では、靴がすでに履ける子では、面ファスナーの有無は大きな違いが見られなかったが、子どもによっては、靴を履く際に、面ファスナーをはがすという行為は手の握力が必要となるため、そのために一人で靴を履く行為に結びつかないかもしれないことが示唆された。面ファスナー以外には、靴紐を結ぶ、という形状の靴もあるが、今回の研究では靴紐の靴はなかった。面ファスナー付きの靴がよく使われるようになったのは、靴紐よりも扱いやすく、足の甲の部分が靴を履く際にしっかりと固定できるためである。そのため、今は面ファスナー付きが主流であるが、面ファスナーがあることで、足は固定できるが、靴を履く行為が難しくなっている側面がある。靴を履きやすくなるために、例えば、子供向けではないが、手を触れずに足を入れてだけでかかと部分が締まるような靴なども新たに開発されていることから、様々な靴を調べた上での考察が必要となる。

また靴の大きさについては、子どもは成長が早く、すぐに靴が足に適したサイズよりも小さくなることから、本研究の調査でも、まれに靴のサイズが小さいために靴が履きにくなっている子もいた。靴の最適な大きさは、本研究の背景でも紹介した通り、「つま先から…10～15mmの余裕が必要であり、5mm以下となれば小さすぎる」と言われているので、子どもの履いている靴が足の大きさに合っているかどうか靴の着脱には必要な条件である。

最後に、保育者の声掛けの言葉についてである。1、2歳児に、「びりびりしようね」や「ぱっちゃん」などわかりやすい言葉をかけており、1歳児でも靴を履くときの動作を理解しやすくなっていた。一方、子どもへの声掛けは、あえて子ども向けの言葉にせ

ずに、大人が普段用いている言葉をかける方がよい、といった考え方もある。そこで、保育者の声掛けの言葉を大人が使うような表現（例えば「テープを押さえましょう」など）に替えてみることで、子どもの靴の着脱の行動にどのような違いがあるのかをみると、その言葉がけが本当に子どもにとって最適かどうか検証することができると考えられる。

以上のような残された課題から、靴の着脱についてより考察が深められると考えられる。

VII. 謝辞

本研究にご協力いただきました園児の皆様、職員の皆様に心より感謝申し上げます。調査協力をご快諾くださいました保護者の皆様にも厚く御礼申し上げます。

参考文献

塩野谷香・片瀬真由美・宮崎康介ほか（2008）「不適切な靴が原因と考えられる成長期の下肢障害」『靴の医学』22（2）、p.83-88

坂口顕 編（2013）『理学療法士のための足と靴のみかた』文光堂、p.6、p.98

神崎綾花・砂本文彦（2019）「小学校の二足制採用の歴史的経緯と全国の現状について」『日本建築学会技術報告集』第25巻、第61号、p.1397-1402

春日井翔子（2022）『1歳児からの靴選び 子供の体は足＝靴から作られる！』Independently published、p.64

塩野谷香・伊藤笑子（2018）「子供の歩容を改善させる靴」『日本フットケア学会雑誌』16（4）、pp.213-218、日本フットケア学会

小林睦、橋本佳美、弓削美鈴、鈴木千衣、八尋道子、柴田真理子、小山智史、阿藤幸子、二神真理子、柳澤佳代（2020）「A地域における幼児期の子どもの足と靴に関する実態調査」『佐久大学看護研究雑誌』12巻2号、p.35-41、佐久大学

武藤芳照（監修）、玉島真理・小野直洋・高山かおる（2020）『子どもの足のトラブルを防ぐために－0歳からの足育のすすめ』論創社、p.98

田中真介監修、乳幼児保育研究会編著（2009）『発達がわかれば子どもが見える＋（プラス）－0歳から就学までの目からウロコの保育実践』ぎょうせい